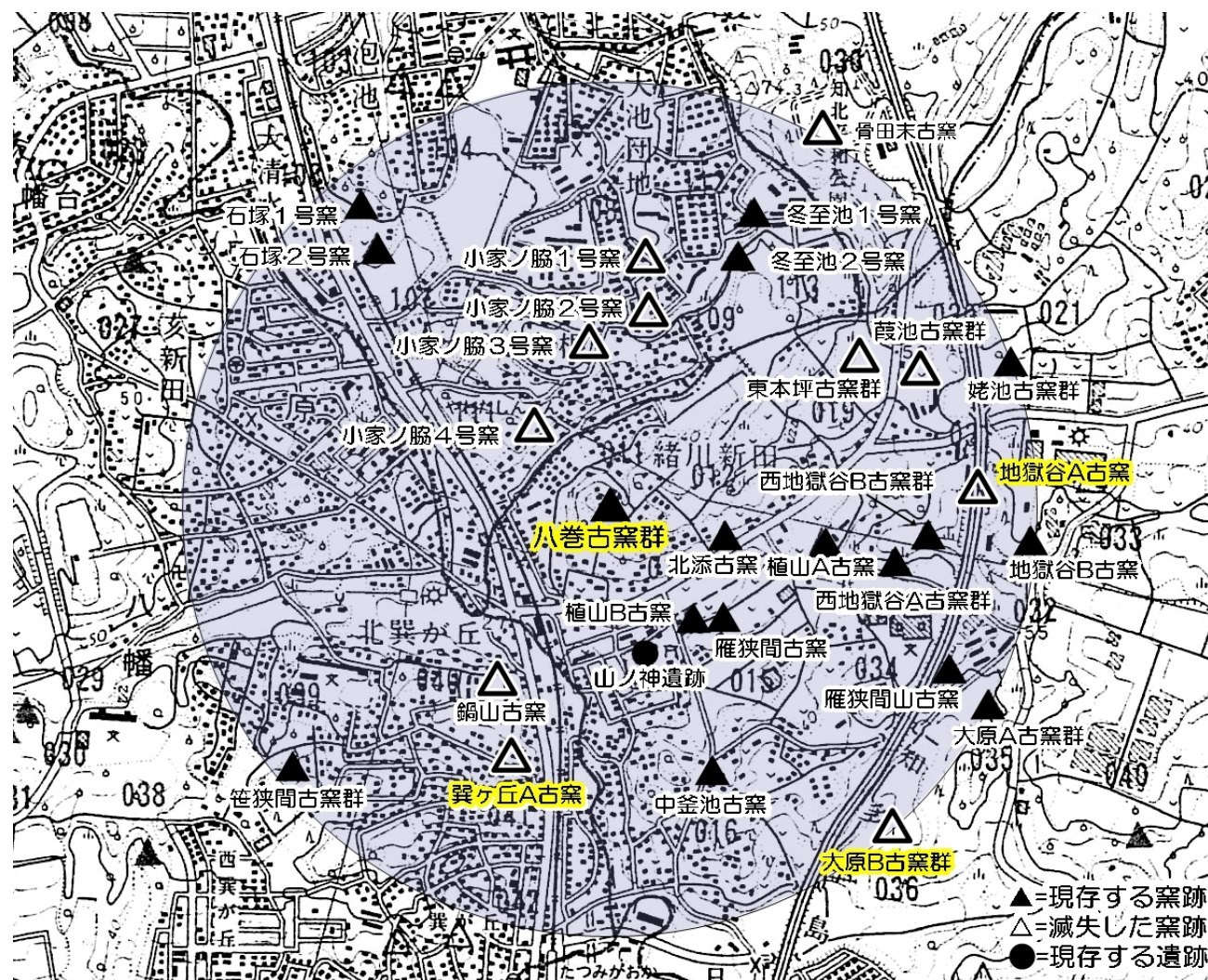


八巻古窯群 周辺遺跡分布図 (八巻古窯群を中心に半径 1km を着色)



円の内側には計 27 の遺跡があり、そのうち 26 基は中世の窯跡
黄色は調査が実施された窯跡

まとめ

今回の八巻古窯群の調査では、遺物を廃棄した層(灰層)を掘ることで数多くの遺物が見つかりました。とりわけ、過去の調査で確認されていた八巻 1～3 号窯とは別個の新たな窯の存在を裏付ける灰層を確認できたことは大きな成果でした。

また、八巻 1 号窯と 2 号窯の窯体が残っていたことが分かったことで、今回の調査で発掘した灰層がどの窯から出た灰層なのか、ということを考える手がかりが得られたことも大きな成果です。

今後は、さらに出土遺物の調査を行い、今回出土した遺物と過去の調査で出土した遺物とを比較することでさらに詳しいことが分かります。現地での調査は完了しましたが、これからも出土遺物についての調査・研究は続いています。八巻古窯群のこれからの成果にもご期待ください。

さらに、あまり周辺では類例のない、「葉の文様のヘラ書き」についても、さらにくわしく調査をすすめる予定です。

はちまきこようぐん 八巻古窯群

調査成果報告会資料

八巻古窯群について

八巻古窯群は東浦町緒川八巻にある、平安時代末～鎌倉時代初(12 世紀前半～12 世紀後半)の古窯が複数ある遺跡です。昭和 36 年に名古屋大学によって調査が行われ、窯体が 3 基発掘されました。

今回は県道名古屋半田線の建設工事に伴い、八巻古窯群の灰層(窯からでた灰や失敗品を廃棄した層)が滅失してしまうため、工事の前に発掘調査を行うことになりました。2009 年度に行った事前調査(試掘調査)では厚い灰層を確認することができ、その結果をもとに 2010 年 4 月下旬より本調査を行いました。



日時 平成 22 年 7 月 24 日(土) 午後 1 時 30 分～

場所 知多郡東浦町 うのはな館

主催 (公益)愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター

共催 東浦町教育委員会

支援 株式会社 シン技術コンサル

八巻古窯群の過去の調査(下の写真)

昭和 36 年の調査写真（左から 3 号・1 号・2 号窯）



出典：東浦町企図録 1979 東浦町誌（復刻版）

調査当時は「須恵器から常滑焼への転化がどのようなものであったのか」ということを調べる目的で調査が実施されました。これは当時、八巻古窯群が多数あった常滑焼の窯跡（知多半島の窯跡）の中でも最も古い時期の窯であると考えられていたためです。そして昭和 36 年の発掘調査では、窯を 3 基発掘するなど、大きな成果がありました。

昭和 36 年調査出土 水滴



出典：東浦町誌編さん委員会 2003 新編東浦町誌資料編3

今でも語り草になっているのは、「水滴(すいてき)」です。水滴は墨を磨る（する）ときに水をそそぐための容器で、碗や皿とは異なり日常生活で使用するものではありません。このような特殊な出土品があったため、八巻古窯群という遺跡は、常滑焼を語る上でも大切な遺跡だと考えられてきました。当時の出土品は、現在瀬戸にある愛知県陶磁資料館に保管されており、一部は常設展示されています。

2010 年度の八巻古窯群の調査成果

2010 年度の八巻古窯群の調査は、4 月 26 日から 7 月 20 日まで行いました。

調査の中心になったのは、窯から出された灰や失敗品が捨てられた層(灰層と言います)を掘って遺物を取り出す作業です。出土した遺物は合計で 170 箱になりました。出土品は、ほとんどが碗(わん)、小碗(しょうわん)、皿(さら)であり、少数の片口鉢(かたくちはち)、短頸壺(たんけいこ)、広口瓶(ひろくちへい)などが出土しました。これ以外には窯で碗などを焼くときに台になる焼台(しょうだい)があります。他に、今回の調査では思いがけない成果もありました。その成果は次に紹介します。

八巻 1 号窯と 2 号窯の確認(1 ページの写真)

今回の発掘調査を始める時に、「過去に調査が行われた八巻 1～3 号窯はもう残っていない」と調査の関係者は考えていました。

ところが、ある日調査区の隣の畑の持ち主さんにお話を伺っていると、「まだ畑の中にあるよ」と。お願いして畑の中を見せていただいたところ、窯体が一部残っていました。窯体の位置から、残っていたのは八巻 1 号窯と 2 号窯と考えられます。

新たな灰層の発見(1 ページの写真)

今回の 2010 年度の調査では新たな発見もありました。過去に調査が行われた八巻 1～3 号窯とは別のものと考えられる灰層を発見したことです。写真の右側に色の黒い灰層がありますが、この中には、八巻 1～3 号窯よりも新しい時期の碗や皿が入っていました。昭和 36 年の発掘調査報告書にも、「1～3 号窯とは別に窯がありそうだ」とは書かれてはいましたが、別の窯の灰層を確認できたことは今回初めての成果です。ただし、窯の本体の行方は依然として不明ですが、隣接する畑の中に灰層が見られることから、窯本体は昭和 36 年の調査時点ですでに無かった可能性もあります。

出土遺物の紹介(出土品の一部を載せています)

碗と皿(灰層 4 から出土)



灰層 4 から出土した碗と小碗です。一見完全な形に見えますが底にひび割れがあるので、捨てられたのかもしれない。実物を展示してありますので確かめてください。

左から灰層 3 出土小碗、灰層 4 出土小碗、灰層 6 出土皿



それぞれの灰層からでた小碗と皿で、残りの良いものを並べました。左から順に器の高さ、口径が小さくなります。これまでの研究から、新しい時期のものほど高さも口径も小さく、小碗は減り、皿が増えていくと考えられています

灰層 3 出土の短頸壺



灰層 3 から出土した短頸壺(たんけいこ)です。短頸壺は破片で 20 点ほど出土していますが、そのほとんどが灰層 3 からの出土です。灰層 3 は土の重なり具合で、最も古い灰層の可能性が高く、残っている窯跡でも 1 号窯に近い位置にあるため、短頸壺は 1 号窯で焼かれていたのではないかと考えています。

WANTED ! (謎のへう書き：情報求む！)



今回の調査で出土した謎の一品です。碗の内側の底、外側の底に「木の葉」の文様がへうのような道具で書かれています。今回の調査では、わずかなけ書いたものを含めて、

これまでに 30 個ほど見つかっています。他の窯跡の例では、愛知県瀬戸市の広久手 12 号窯、岐阜県多治見市の大谷洞 3 号窯に同じような例があります。このような例をご存知の方はご一報ください。